

山東開港と土産交易の変貌

森 紀 子

は じ め に	497
I 山東開港と南方商人	497
II コロニアル都市・青島の食肉市場	503
お わ り に	512

は じ め に

清末、煙台、青島の二港が開港されたことにより、山東省の土産の一部は国際交易品になっていった。それとともに、市場に参入しようとする各国商人は当地の伝統的な商取引に対応する必要性に迫られることになった。一方、列強により新たな需要を喚起された土産品も生まれ、その取引の増大が社会的摩擦をもたらすケースも生じるようになる。土産交易における在来セクターと近代セクターの混在と表現することもあながち的はずれではなかろう。

そもそも山東の土産交易はどのような人々によって推進され、そこにはどのような特徴が見られるのであろうか。本稿では開港に伴って土産品が国際交易の対象となっていく様子を、牛肉や落花生などの取引からうかがい、あわせて煙台、青島二港のおかれた国際的な位置づけをも考察していきたい。

I 山東開港と南方商人

1 煙台開港と広東商人

山東の開港は天津条約（1858年）による煙台の開港（1861年：東海関設立）に始まる。

しかし、煙台開港以前、すでに山東沿海には海禁をおかして外国船が出没していた。すなわち、道光12（1832）年6月には広東での交易が公平でないとの理由でイギリス船が劉公島沖合に現れている⁽¹⁾。また道光23（1843）年7月には登州府の栄成、文登、福山等の県に洋船2隻が停泊し、乗船していた広東、江西等人が上陸して回状をまき、商民との貿易を要求するということがあった⁽²⁾。これに対して清朝側は、洋商と内地の匪徒が通じてアヘンの私販を企図しているとの警戒を示すのであるが、ここではまず、広東人が洋船に同乗して洋商の要求を代弁していることに注目しておきたい。

さて、福山県煙台付近は船の停泊が可能な地勢ということで商船が集まり、道光年間には自然口岸として次第に帆船が停泊するようになっていった。当初、商号もわずか二三十家だったものが、道光の末には商号千余家を数えるに至ったという。帆船には広帮、潮帮、建帮、寧波帮、閩裡帮、錦帮があった⁽³⁾。

そもそもこの時期、煙台に帆船が集中するようになった背景には、道光、咸豊年間の漕運が海運によったということも大きな理由としてある。すなわち、嘉慶年間から南北流通の大動脈である大運河は土砂の堆積に苦しんでいた。嘉慶6（1801）年の黄河の決壊は大量の土砂をもたらして運河を塞ぎ、道光4（1824）年の黄河の決壊により、ついに海路運送の提案がなされたのである⁽⁴⁾。山東の諸海口は南北補給の中継地となり、煙台発展の機会となったのである。

上記のように、帆船交易が隆盛となるなか、洋船までがしばしば出現してきたのであるが、咸豊8（1858）年の天津条約により天津・上海間を汽船が往来するようになると、煙台には必ず停泊するようになった。開港目前の咸豊9（1859）年ともなると、外国商船の沿岸交易は既成事実となっている。外国商船は登州、牛庄など沿海各所に外国産阿片を販運し、豆餅を積んで上海へいく。山東煙台地方では商船が停泊して貿易を行う一方で、范姓の広東人が代行して土地を収買し、建物を建造しようとした。それを阻止しようとする郷民との間で乱闘騒ぎまで起きている。清朝側は条約未締結を理由にこの范氏を捕捉させるとともに、洋人による豆石、豆餅の上海への販運を禁止している⁽⁵⁾。

ところで、咸豊9年は郭嵩燾が山東の税務調査を命じられて沿海諸港を巡視していた年である。『郭嵩燾日記』の同年10月18日の項に、この范氏とおぼしき人物の記事がある。この日郭嵩燾は戲山口、竜門港口に至り税簿の検査をしているが、「其の実、戲山口にはなお未だ嘗って洋薬を販運するの事あらず、ただ未だ徴税せざるのみ。外間の弁事、おおむねかくの如き也。洋紀綱范姓の言を収〔?〕むるも亦かくの如し。」⁽⁶⁾とある。范氏には阿片私販の疑惑がかけられていたようだ。

ちなみに、郭嵩燾が山東省境に入ったのは9月27日であり、10月初7日に福山県北関に

投宿して翌8日煙台に到着した。「凡そ貨の出入は並びに抽税す。煙台は向に行戸なし。閩広船至らば、必ず相知るところの者に投じ、乃ち攪りて以て客と為し、これが為に代りて售主を覓む、売買両辺、各おの行用二分を得る、所謂私充行戸にして、包攬把持する者なり。官商の罔利の情形は、略むねこれに具う。」⁽⁷⁾と、煙台における福建、広東商人の商取引の慣行を述べている。ここにいう「私充行戸」、すなわち客と貨物を預かり売買を請け負うというこのスタイルは「行棧」を指すのであろう。

東海関が咸豊11(1861)年に設置されて以後の煙台では油餅業、粉乾業が盛んになり、草帽辯の対外輸出も極盛時には三百余万両に達したという。当地の商家で巨とされるものは「行棧」であり、客船に代わって貨物を売買し口銭を取る。「行棧」業者は数十家を下らなかった。しかし、大連が開港してから油餅業は奪われ、残ったのは二十余家で本地の用に供するのみ。青島が開港してから草帽辯も後を絶った。煙台以外の開港地が増えるにつれ売買の道も広がり「行棧」の利も微かになっていったという⁽⁸⁾。

総じて煙台の広幫は豆貨、粉絲、南貨を扱っていた。往時の盛んさはなくなったというものの、民国5(1916)年において煙台総商会にはなお4人の広東籍董事がいた。すなわち、大埔の張文濂〔張弼士〕(張祐公司酒行を經營し葡萄酒も醸造)、朝陽の范紹顔(德隆号行棧を經營)、香山の楊枝(太古帳房を經營)、新会の陳煥康(交通銀行を經營)の4人である⁽⁹⁾。また、開港から80年あまりを経た昭和14年版の調査書でも「芝罘支那人はその二三割が広東、福州および寧波人等である」⁽¹⁰⁾と記されている。改めて南方商人と煙台との関わりの深さがうかがえよう。

2 青島の広東商人

郭嵩燾が膠州城東南十八里にある塔埠頭海口を視察したのは、咸豊9年11月初2日のことであった。この地には「行戸廿余家」がある。交易が盛んな地点は附城の西南郭で、旧来、福広行(孫公順)、杉木行(王德茂)、綿花行(陳正隆)、驢騾行(匡吉成)、草果行(王祥升)油餅行(孫裕盛)、醃猪行(徐德順)、乾粉行(匡公聚)の8行家があった。近年、交易の一部は金家口に、また一部は煙台に移動して閩広船はついに姿を見せなくなったという⁽¹¹⁾。また初5日の日記には、膠州の福広行、姜行は往時きわめて隆盛であったが、今は閩広船があまり姿を見せないなのでこの二行は引き当てがない、草果行、醃猪行は比較的良い、と記されている⁽¹²⁾。福建、広東からの交易船が煙台にその比重を移していることがよくわかる。もっとも、その40年後にはドイツによる青島大港建設にともない、近隣の小港はもとより、やがては大港(煙台、龍口、威海衛)の商務も青島港に吸収されていくのである。

近代都市青島の現出には、膠州湾租借後のドイツによる多額のインフラ投資があったことは疑いもない事実である。しかし、清朝においてもすでにドイツ上陸以前から膠州湾の重要性は認識されており、許景澄、朱一新らの建言によって、光緒18（1892）年、天后宮東側に総兵衙門が設置された。そこには登州鎮総兵章高元の率いる公称3000人の部隊が駐屯したのである。総兵衙門や二本の棧橋の建設、部隊を支える糧食等の必需品の補給、と数え挙げていけば、相当の労働力と物資流通の下支えが周辺に存在しなければならないだろうと私には思われるのであるが、このドイツ占拠以前の膠州湾沿岸のイメージについては、中国人研究者の間でも意見の分かれるところである。

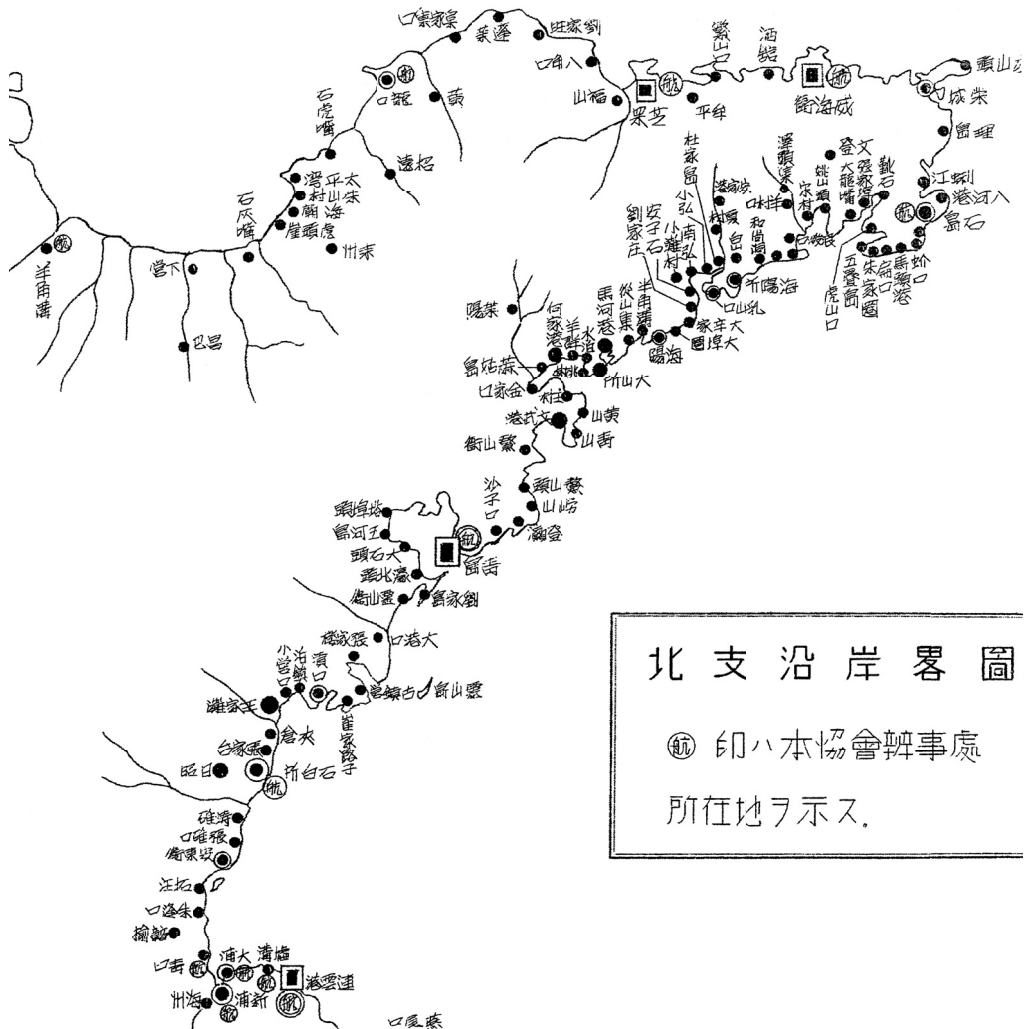
胡存約の『海雲堂隨記』⁽¹³⁾の記録によれば、光緒23（1897）年、天后宮付近には商店65家、暫時営業の借店6家があり、それなりのにぎわいを見せていたという。また、膠州湾内外には民船の交易港として金家口、女姑口、塔埠頭口等の小港があり、青島大港が建設されるまでの間、ドイツ船も塔埠頭口を利用していたのである（図表-1参照）。

さて、ドイツ占領以前の膠州湾の商業状況を見れば、土産品貿易は主要には民船が担ってきた。ただ一部分が青島を経由するのみで、大部分の土産品は膠州の民船港口（塔埠頭口）で荷下ろしをしていたのである。幾百年来の膠州の伝統貿易項目は、各種豆類、原棉、帶子棉花、上海棉紗、各種糧食、一級紙張、二級紙張、紙張・焼紙、紅糖、白糖であった⁽¹⁴⁾。

ただ、塔埠頭口は河口にあたるためしばしば土砂堆積に悩まされていた。総兵衙門が設立された光緒18（1892）年、塔埠頭小河の土砂堆積を浚渫するため、河工捐として寧波、福建の民船より募金をし、不足分はさらに南方民船貿易関係の商行より借金している。山東沿海港口が南方貿易商にいかにか依存していたかがよく伺えよう。のちにドイツ当局はこの土砂堆積の不便を口実に塔埠頭口の民船貿易までも青島港に移転させることを企図したのである。それかあらぬか、鉄道開通以前、青島—塔埠頭間は汽艇を交通手段にしていたのであるが、安全航行のためこの水道に設置した小型ブイを、ドイツ港務局は汽艇輸送停止とともに撤去してしまったという⁽¹⁵⁾。

ところで、ドイツが青島市を建設した当初、その住民構成はどのようなものであったろうか。1892-1901年の海関報告によれば、その人口は外国籍住民約600人、警備部隊約1500人とある。これら外国人以外に、中国人人口も増大していた。労働者には山東人以外、寧波、上海、広東からの少なからぬ南方人がいた。彼らが青島で探し当てた職種は、機械技工、商店店員、服務員、調理師などである。青島およびその郊外の総人口は約14,000人とされる。また山東人と南方人は大鮑島、台東鎮、台西鎮一帯に商店と批発商行（卸売り）を開設した。当初の青島市では外国人と中国人の居住区は厳然と区分されていたからである。しかしながら、実際の市政運営ともなれば、ドイツ総督府は中国人、とりわけ有力な商人

図表-1 山東半島民船口



資料) 航業聯合協會編『昭和十四年度) 北支沿岸各地別民船貿易統計表』

達の力を借りないわけにはいかなかった。

光緒28(1902)年4月、青島租界中に中華商務公局が設立され、董事12人を置く。董事は齊燕、三江、広東の三会館から推薦する。三会館の代表者は、齊燕は朱傑(天津人、成通木行経理)、三江は周宝山(浙江人、周鋭記経理)、広東は古成章(香山人、大成棧経理)である。董事は董事長1人を公推し、董事長は総督の参事会に列席することができる。およそ華人の戸冊、争議調停、受産の不分明等は公局が処理し、市政の興革も建議する。また、華商の房捐を酌収して、公局の経費にあてる。公所は天后宮に設けられた。

ついで、光緒31（1905）年9月、青島商業會議所が成立する。宣統元（1909）年10月には膠澳華商が青島商會を組織するとの申請が北京農商部で批准される。これらを受け、宣統2（1910）年9月、ドイツは中華商務公局および董事12人を取り消し、齊燕、三江、広東の三会館から4人を推挙し、総督参事会に列席させることにした。このように広東商人は青島の有力者として、当初から青島市政の一翼を担っていたのである。そして民国3（1914）年1月には華人の居住制限も撤廃されるのである⁽¹⁷⁾。

さて、山東経済界で広東商人の力が発揮されたのは、先述したように「行棧」業においてであるが、彼らが主として担ったのは落花生交易だった。そもそも山東の出口土貨は落花生が第1位をしめ、その製品には殻付き、殻なし、精製油、餅の四項目があった。民国になってからの消費地をみると、殻付きは欧州を主として、米国、日本がこれに次ぐ。精製油は米国が主で、広東、香港、欧州が次ぐ。殻なしはドイツ、米国、英国、オランダ、および日本、スペイン、フランス、ベルギー、デンマークが等しく大口購入先であるが、やはり広東が第一位を占める⁽¹⁸⁾、という具合に国内消費を伴いながら堂々たる国際商品になっていた。その端緒は1909年、ドイツ商人が初めて青島から落花生を欧州に運送したことにあり、以後、ドイツ、日本の両国は買弁と行棧を通して大量の落花生を買い付け、国外に搬出したのである⁽¹⁹⁾。

その際、外国商社の買い付けを請け負った「買弁」と「行棧」に広東商人の存在が大きい。例えば、デンマーク人アンダーソンの創設（1897、在タイ国）にかかる海運業、東アジア有限会社（宝隆洋行）は、本店をコペンハーゲンに置き、支店は世界102カ所、中国には上海、漢口、ハルピン、大連、青島、天津の6カ所があり、上海以外の経理はその地の領事を兼任した。青島支店は1922年の設立であるが、広東人羅叔義が1932年の満期退職まで上海、青島の買弁を兼任していたのである。青島宝隆洋行は主として落花生をあつかつていた⁽²⁰⁾。青島において落花生をあつかう「行棧」も、資本金の大きなものは宜今興、裕和祥などの広東商人であり、1920年代には青島における落花生総輸出量のほぼ半数が広東商人によって華南に向けて輸出されたという⁽²¹⁾。

小結

以上、ごく大まかに山東の開港地、煙台と青島における広東商人の活躍を見てきた。列強により開港を迫られた山東の海口は、つとに民船による土産交易で賑わい、とりわけ南北交易の中継点として閩広船の往来も活発であった。広東商人の役割は主として「買弁」と「行棧」であったが、南北交易の歴史的実績を持つ広東商人にしてみれば、洋商の代理という以上に、自らの経済的要求を洋商に借口したともいえる。清朝の海禁政策を突破す

るためにも、それは有効な役割であった。先駆的な都市計画のもとに近代的インフラ整備をおこなった青島ドイツ総督府にしても、外国籍人口を遙かにしのぐ華人住民の民政に関しては、その具体的な実施は有力華人商人に委任せざるを得なかったし、内地への買い付けなどの経済活動に関してはことにそうであった。広東商人と洋商は活動の分担をすることによりすみわけを行い、互いに利益を得ることができたのである。ただ、日本商社の中国進出においてはその様相はいささか変わらざるをえなかったようだ。日本商社の取引方法は中国商人と競合する場面を生じたからである⁽²²⁾。

Ⅱ コロニアル都市・青島の食肉市場

本節では特に牛肉市場に注目して、青島における列強の経済活動、帝国支配の重層性を見ていきたい。

ちなみに、青島の貿易事業の全体を見ると、牛肉は輸出品として重要な品目ではあったが、必ずしもその大宗を占めるようなものではなかった。農業製品でいえば上述の落花生や麦稈真田、綿花等が有力な産品としてあったし、鉄、石炭等の鉱産品の産出もあった。その中で、あえて牛肉を取り上げるのは、同時代のアメリカ・シカゴの食肉市場に代表されるように、それが加工における流れ作業、大量処理とすこぶる近代的外観を備えた産品であること、しかも中国の伝統的な文化の枠組みに、強引に接木した形で生れた交易品であり、そのため様々な摩擦が生じたことに注目したいからである。

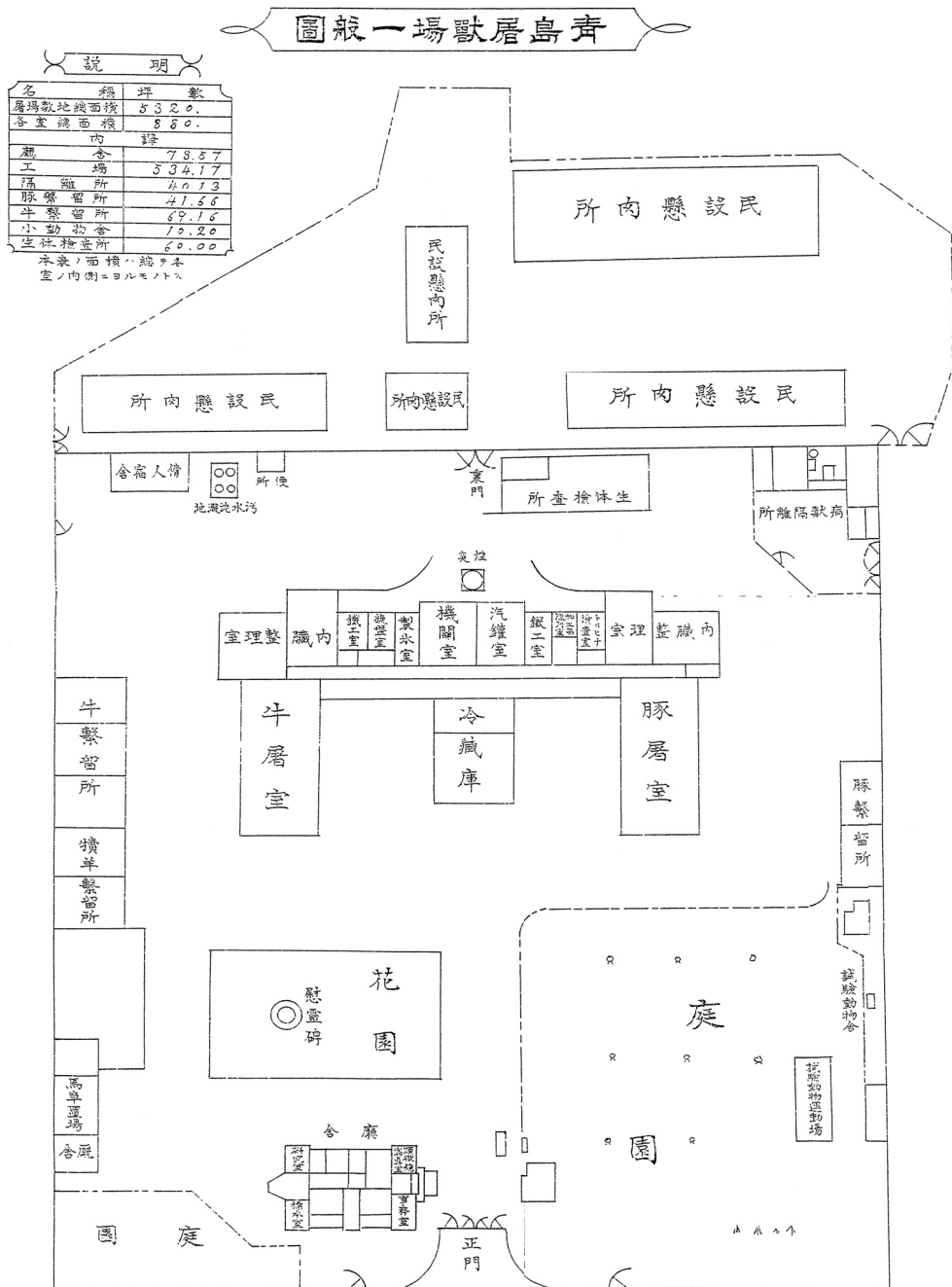
1 ドイツの屠獣場建設

既述のように、膠州湾上陸以後のドイツは多大な投資をもって青島の都市建設に腐心し、壮麗な欧風建築群を出現させた。その中にあって、ひととき異彩を放つものが、東洋一と称せられた近代的な屠獣場であった（図表-2参照）。

すなわち、青島の軍事拠点化をはかるドイツにとって、駐留する軍隊の食糧を、衛生面まで考慮した上でどのように確保するのかが、現下の大きな問題であった。早くも1899年には屠獣及屠肉検査規則を發布し、1901年台西鎮（小泥窩）に官立の仮屠獣場を設置している。その意味で青島における食肉は、基本的に軍需品としての性格も併せ持っていたわけである。

1903年には、本格的な屠獣場の建設が起工された。初代場長 Dr. エッケブレヒトはその建設にあたって、上海、香港等の租借地を視察しつつ、本国ドレスデンの屠獣場設備をそのモデルにしたという。

図表-2 青島屠獸場平面図



資料)『青島屠獸場』

当時のドイツにあって屠獣場の経営は自治体の給付事業として明確に位置付けられ、都市計画には必ず組み込まれるものであった。本国の都市計画における屠獣場の様式を青島に持ち込み、85万マルクを費やした結果、1906年、敷地面積8600余坪、营造物18棟、場長以下獣医6名、機関士1名、会計2名（政庁より出張）のドイツ人職員と20～25名の中国人職員を擁する、東洋一の規模を誇る屠獣場が開設された。また、この年には徳華高等学校農林科に畜産試験場が付設されている。

以後、台西鎮にセツハー牧場（1908年）が、李村にマッテンストック牧場（1909年）が、湛山にブランド牧場（1913年）が開設された。また、山東土産牛の改良のため、ドイツ本国よりエファールレンダー種乳牛の輸入もしている（1910年）。数年後には改良牛の雑種繁殖も326頭に達し、種付けの公開がなされた。その他、品質保持のため牛乳同業組合を設立（1910年）、メリノー種綿羊およびザーネン種乳用山羊の輸入（1912年）、さらには品評会、奨励金の下付、牧場・牧草・家畜飼料等の調査を実行するなど⁽²³⁾、畜産業の積極的な育成がはかられたのである。そして、青島における食肉業は、爾後、ロシア、アメリカ、日本の大いに注目するところとなる。

2 ロシアの牛肉買い付け

一説に、ロシアが青島から食肉の買い付けを始めるのは1910年とされているが⁽²⁴⁾、これは必ずしも正確ではない。

そもそも、中国とロシアの外交交渉は長い歴史をもつ。しかし、極東方面が問題となってくるのは、ロシアの南下政策が露わになってからといえよう。光緒17（1891）年、ロシアはウラジオストックに鉄道を開設する⁽²⁵⁾。清朝が海防のため青島に砲台を築き鎮守府をおいたのもこの年である。

そして、日清戦争後の三国干渉の見返りとして光緒21（1895）年10月、ロシア海軍は膠州湾での艦船の越冬を願いでて許可される。翌年9月、「華俄道勝銀行契約」が結ばれると、付随して中国東省鉄路会社が設立され「東清鉄道会社条約」が結ばれた。こうして満洲への足がかりを固めながら、光緒23（1897）年11月、ドイツの膠州湾上陸を口実にロシアはシベリア艦隊を旅順口に入らせ、翌年、ついに旅順・大連の租借に成功したのである。しかし、このようなロシアの動きは同じく膨張政策をとる日本との間に大きな緊張を生じさせた。光緒30（1904）年、ついに日露戦争の勃発に至るが、ロシアの敗北により、旅順・大連の租借権は日本に移った。そして、中国・ロシア間にはハルピン行政権問題が生じたのである⁽²⁶⁾。

ところで、東北部におけるかような国際情勢の展開は、山東省からの大きな人の移動を

派生させることになった。

1904年4月、膠海関稅務司オールマー（Erich Ohlmer）が帝國海軍省長官ティルピッツ（Alfred von Tirpitz）に意見書を送付した。その中でオールマーは、山東から滿洲へ、毎年20万人以上の移民が渡航していること、その移民の主たる經由地は煙台であり、1903年、煙台―牛莊間を往復した移民は3万8600人、ウラジオストックとは2万2100人、旅順とは14万6000人、大連とは5万6000人を数えたと指摘している⁽²⁷⁾。

さらに「遅くとも1907年にはすでに青島に山東の契約労働者の斡旋に関わる業者が存在していた。1907年、ある業者は、総督府にウラジオストックへ向けて山東の契約労働者を輸送する際に、個々の労働者に旅証を発行するのではなく、まとめて発行するように依頼し、総督府は業者の要請に応じて特別な旅証を発行した。しかし、ロシア側から今後の旅証の発行は個々の労働者に個別に行うようにとの要請があったため、ドイツ総督府は、煙台との競争を考慮して、これらの移民に向けた旅証発行の費用を一時的に引き下げる措置をとって、業者に便宜を図った。さらに、総督府は、ウラジオストックに渡航する際に必要なビザを取得することを容易にするために、青島にロシア領事を赴任させるようにドイツの北京公使館に打診した。これにより、ロシア領事館が翌1908年に設置され、ロシア商人が副領事を務めることになった。」⁽²⁸⁾という。

これからみれば、山東からウラジオストックへの大量の労働力移住が、青島にロシア領事館を設置させる契機となったのであり、人の流れも煙台經由から青島經由に変わっている。そして、このような人口移動が生じたということは、当然ながら、かの地の経済動向、開発動向を反映しているわけである。いみじくもロシアの牛肉買い付けが顕著になるのもこの頃からである。

つとに、1899年4月17日の北京議定書により、同年7月1日に膠海関が設立された。この膠海関の1912年～1921年報告（1922年4月29日付）に家畜輸出に関する詳しい記載がある。すなわち、「何年も前から青島のロシア商人は旅順大連に住む同胞の生活需要のため、家畜出口の貿易を始めた。第一次大戦前、青島から国内外に出口された家畜の数量は50万1,000頭に達するという」と、ロシア商人による家畜買い付けの目覚ましさが指摘されている⁽³⁰⁾。

済南駐在のドイツ領事ハインリヒ・ベッツの報告（1911年出版）に拠れば、獣畜の輸出が増加したのはこの10年ほどで、主には芝罘を経由してウラジオストックに向かっていったという。1908～09年の冬期には、冷凍設備を備えたロシア、アメリカの汽船が3万担、価格にして21万両に上る冷凍牛肉を芝罘からウラジオストックに輸送したという。これに対して青島がウラジオストックに向けて獣畜の輸出を始めたのは最近のことで、1909

年には生獣3399頭、屠肉699担が輸出されたという⁽³¹⁾。以後、青島からの輸出は芝罘を凌ぐようになり、その最盛期（1913年）には他の家畜も合わせて43,904頭が屠殺されて、226,334マルクの収益を挙げたという。

ところで「家畜は山東各地で繁殖させられているが、著名な産地は山東西部の回民が多く住む地区である。例えば曹州、沂州、莒州、萊州一帯である。」「いわゆる山東牛の大部分は華中各省（河南、山西、陝西、甚だしきははるか甘肅一帯まで）からもたらされ、山東で飼育成長させたものである。」⁽³²⁾という記述や「青島から輸出される牛肉ははなはだ多かったが、ほとんど山東省産ではなかった。ドイツ管理時代の統計によれば、輸出牛肉の70%は河南省からであり、20%が山東西部のものであり、10%は河北南部から運ばれたのであり、この割合は今に至るまで変わらない。」⁽³³⁾との記述から見られるように、青島から輸出される生牛・牛肉の産地は山東西部から河南を中心に華北一帯に広がるものであった。青島が鉄道によって内陸部と結ばれたことにより、肉牛の集荷が容易になったと同時に、その移動ルートにも変化が生じたものといえる。

そもそも、山東における牛の大集散地は済南であった。各地より済南に集まってくる牛は毎日数100頭から1,000頭余りに達するという。これらの牛は牛棧に係留され棧主の仲介によって売買された。しかしながら、山東牛として名声の高いこれらの牛は、決して専用の牧場で多数飼育されるというようなものではなく、ただ農家が飼育する2、3頭の牛が蒐集されたに過ぎないのであるが、それが総数となると驚くべき多数にのぼっていた。すなわち、生産の面から言えば、当時の中国における牛の養育は農家の副業にすぎなかったといえる。

「そもそも農民が牛を飼うのは耕耘の需要のためである。」「牛買いの徒はみなそれぞれ農村に買い付けに行った。農民は経済上逼迫したり、あるいは飼育が困難になったり、やむを得ない事情に際して始めてこれを売り、焦眉の急をしのいだ」⁽³⁴⁾のである。このため、ロシア人向けの牛の買い付けが顕著になると、清朝の官僚からは強い抗議の声があがった。すなわち、1910（宣統2）年5月、天津県董事会から直隸総督に以下のような訴えがなされたのである。これからみれば、ロシア向け牛肉の出荷は、芝罘のみならず天津も重要な拠点としてあったようだ。

すなわち、本来耕作のために飼育されていた牛が、通商以来、牛を食用品とみなす外国人により消費されるようになった、とりわけ天津港のドイツ各商がロシア兵站の代理として黄河南北各地で牛を求めるようになり、礦務局付近では日に百数十頭の牛が屠殺されている、前年からは鉄道により多数の生牛が輸出され、十数万頭を下らない、ロシア兵站が購入に総力を挙げているのは、軍事の備えであろうが、このため北洋一帯では大量の牛が

失われ、価格も暴騰している、農家は手が出ず農事への影響は浅くない、として耕牛の輸出を厳禁するよう求めたのである⁽³⁵⁾。

これを受けて清朝政府は、一旦は牛の輸出を禁止する。しかし、各国商人の要請に押され、1910年11月1日より芝罘、青島を經由して山東から輸出される獣畜は合計毎月500頭（年6,000頭）とする旨の輸出制限を行った⁽³⁶⁾。しかしなお、ロシア領事はこの輸出制限策に強く異を唱えたのである。彼は山東巡撫に対し、輸出牛は農耕牛ではなく、民間が輸出用に飼育した肥牛であることを理由に禁令の緩和を要請したのである（俄領事照會宣統三年三月十一日）⁽³⁷⁾。

ロシア領事のみならず、済南駐在のドイツ領事を経て青島商会からも制限の厳しすぎるのがいわれ、制限の撤廃ないしは定額の増加、少なくとも倍にして欲しいとの要請を受け、清朝側は1911年6月1日以降、芝罘、青島両港で合計毎月1,000頭（屠肉、冷凍肉も含め）の輸出を認めるという緩和策を打ち出さざるをえなかった⁽³⁸⁾。しかし、この制限がどれほど有効性を持ったかは疑わしい。清朝の崩壊はもう目前であった。

3 民国初期の牛肉市場

中華民国農商部発行『農商広報』3年9月号掲載の「青島の商工業」によれば、1912年の始め、中国の商業はなお革命擾乱の影響を受けつつあったが、北京政府成立以後は漸次回復の緒についた。青島も革命の影響を受け、同年上半期の輸入は僅か日用必需品に限られたが、下半期に至り市況は次第に良くなって、国内の秩序安寧とともに国内の需要も増加し信用も回復されて、一挙に上半期の欠損を補うことができた。中外の商人は一人の破産者も出さなかった、という。

牛肉及び冷凍肉の輸出貿易は、従前の制限が全く解除され、極めて旺盛となった。主たる仕向け地はやはりウラジオストックであった。なお、ウラジオストック及びニコライスクに家畜を輸送する船舶も漸次増加の勢いとなった。この航路に従事する船舶には中国、日本両国の船舶以外、ノルウェー、ロシアの船舶がある。ちなみに、これらのうち青島に帰航するものは鉱物を輸送して利益を上げていたという。この鉱物は更に青島から海外に輸出されたのである⁽³⁹⁾。

こうして前述のように、1913年、ドイツ管理下の青島における牛肉輸出はピークをむかえた。しかし、第一次大戦と青島における日独戦は、青島の政治環境を一変させる。

1914年11月、日独戦に勝利した日本軍が青島を占領すると、屠獣場もその管轄下におかれ、軍獣医部が畜産行政を取り扱うこととなった。ただ、同年12月中のみは、ドイツ人肉商ウェーバーなるものにその使用を許可している⁽⁴⁰⁾。1916年5月には軍獣医部を廃

止し、青島軍政署に畜産課を設け、畜産及び警察に関する獣医行政を掌理させた。さらに軍政から民政に移管すると、翌1917年10月、青島守備軍民政部を置き、畜産業務は総務部に属することとなった。この間、1915年中に日本の商人が日本向けに牛肉の販売を試みたところ成功を得て、青島の牛肉輸出は顕著に増大したのである。

ところで、肉食文化の伝統が希薄であった日本人にとっては、“牛鍋”を食べることが文明開化と同義語であったように、肉食自体が近代化の象徴であった。急速な近代化、軍国化をはかる日本では、その人口増（1872（明治5）年を100とすると1918年では171になる⁽⁴¹⁾）と食生活の西欧化（政府の肉食奨励）に伴い、畜産資源への関心が強まってくる。朝鮮半島では朝鮮総督府が畜牛の品質改良の訓令を発しているし、日独戦争後、ドイツ人捕虜が日本の青野ヶ原収容所において自分たちの食用に豚を飼育した時でさえ、日本の農業学校生、専門家、師範学校生、軍人らが見学を訪れ、彼らから飼育法を学ぼうとしている⁽⁴²⁾。

ちなみに手元の数字によれば、1917年から1925年までの平均値として、日本国内の畜牛総頭数は約141万頭であるが、年間生産数約21万頭、屠殺数約30万頭であり、単純計算で年々9万頭の減少をきたすとされた。その補給として年々約5万5千頭の朝鮮牛が移入されたのであるが、なお3万5千頭の畜牛資源の減少が見込まれ、海外からの補給が大いに期待されたのである。いささか後の数字であるが、1921年から25年までの日本での牛肉の平均総消費量の22.85%が海外からの輸入であった（朝鮮移入牛は含まず）。そして、その数量においては青島からの牛肉輸出が第1位であった⁽⁴³⁾。

参考のために山東省の畜牛頭数をみれば、確実な統計はないとされるが、1915（民国4）年の農商部の発表として2,416,134頭という数字が挙げられている。また、単位面積あたりの頭数を畜牛濃度として比較をすると、1平方キロあたり日本が4.0頭、朝鮮が7.4頭、山東省が14.8頭と、山東における牛飼育の盛んさを印象付ける数値も挙げられている⁽⁴⁴⁾。

このような背景をもって、青島から日本への牛肉輸出は増大していったが、それと同時に、日本にとっては青島の屠獣場施設そのものが感嘆の対象であり、学ぶべきモデルであった。

ドイツから屠獣場の経営を引継いだ日本は、軍政時代に山東畜産資源の状況を調査して、『山東畜産地図』『支那牛ノ研究』『山東牛及山東ノ畜産物』『中国須設立専警取締食肉論』『山東研究資料第三編（畜産ニ関スル部）』などの報告書を発刊して関係部門や畜産関係者に配布している⁽⁴⁵⁾。また、その調査地は①山東鉄道沿線及泰安、曲阜、兗州、済寧地方、②山東鉄道以南各地、③山東省済南以北臨道各地、④李村出張所管内及大連、芝罘地方である。日本は山東の畜産資源について、これ以後も引き続き調査をしているが、その中で

興味深い指摘について少し触れておきたい。

輸出牛が農耕牛であるのか民間が輸出用に飼育した肥牛であるのかという、前述の議論ともかかわりをもつことであるが、日本の調査によれば、犢の産地として重要な山東西部（魯西）においては、次のような分業的な飼育がなされているというのである。

小農（所有耕地10～20畝）2才までの牡牛、牝牛

中農（所有耕地20～40畝）1才以上4才までの若劊牛、成劊牛、牝牛、

大農（所有耕地40畝以上）成劊牛、肥育牛

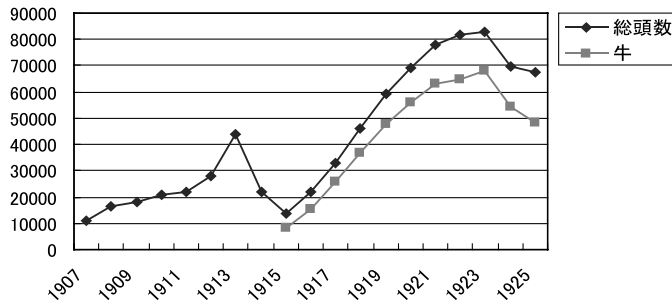
すなわち、小農は耕作面積が少ないことから、廉価な牝牛を飼養して農耕に使用すると同時に繁殖をさせ、仔牛生産を副業とする。仔牛が2才前後になると飼料の負担に耐えず売却する。中農はこれを購入して使役しながら育成し、3、4才になると再び市場に出す。

大農はこれを購入して使役しながら適当な時期に肥育する。肥育は多量の濃厚飼料を要するため、ほとんど大農の専業となり、食肉市場が好況な時は夥しい利益を得たといわれる。このように、農家の経済力によって牛の段階的飼育がなされ、年齢によって市場を転々としたのち、肉牛としての肥育を大農がほぼ専業として行っていたのであれば、耕作牛がそのまま輸出されたわけでもなく、前述のロシア領事の言い分も、あながち根拠のないことではない。

また、ドイツ時代の在来種改良についても、エファーレンダー種は乳牛であるが、低地産牛であり、高地産型の山東牛との混血はそれが進めば進むほどむしろ在来種の特質が退化してメリットがないとしている。そして、一般農家で飼育されている山東牛には外来種との混血はいささかもないと断言している⁽⁴⁶⁾。実際、ドイツ統治が終わった時点で、在来種改良もそのまま立ち消えたようである。

さて、1916年にはアメリカがマニラ政庁納肉の供給を東洋に求めて契約召募するが、これに応じる形で米商ウィリアム・カッツ（開治洋行）が青島に冷蔵庫を建設する許可を受けた⁽⁴⁷⁾。以後、冷蔵肉輸出業は開治洋行の専業であったが、1918年4月、日本の大倉組と提携して冷蔵組合となった。こうして毎年大量の冷凍牛肉がフィリピンのマニラに輸出され、現地のアメリカ軍に供給されることとなった。日本とアメリカ軍という二大販路を獲得した牛肉輸出はドイツ時代をはるかに凌ぐものとなったのである。海関報告にも「日本が青島を占領して以後、ここでの家畜貿易は驚くべき発展をしている。1920年についていえば、ただ青島1ヵ処からの輸出家畜が52,234頭にのぼる⁽⁴⁸⁾」と記載されている。屠獣場の設備もフル稼働させられ、その屠殺能力は、起重機27台を使用、各機5名1組の屠夫を配置、1日8時間作業で牛850頭が標準であるが、時間を延長して1,000頭以上処理したこともあるという。その他、豚150頭、羊80頭を屠殺することができた（図表-3参照）。

図表-3 青島屠獸場年別屠殺頭数



資料)『青島の現勢』、『青島屠獸場』

しかし、このような状況に対しては、やはり中国側からの苦言が呈された。すなわち、山東省農会会長戴耀東が山東省長に小麦と畜牛の輸出を厳禁するよう願い出たのである⁽⁴⁹⁾。すなわち、山東省の農耕に牛力が欠かせないこと、しかし、1916、17年の水害により農家は牛を飼養できず安値で売り払ったこと、また、1917、18年は牛疫の流行で牛の3、4割が死亡していることを挙げ、役牛の不足を訴えた後、英商和記、美商開治、俄商豊記、日商高橋が安価な山東牛を済南で買い付け、青島を経由してシベリアにまで輸出して、その数は日に200頭余に達するほか、豊記は市場に屠牛場を設立して、日に100頭余を屠殺している、と各国の山東牛買い付けの過剰さをいう。その主張は前述した清末の天津農商部会の抗議とまったく同質である。また、すでに撤廃されたと各国がみなしている、清末の輸出制限数＝毎月1,000頭以内を根拠として、大量の牛肉輸出への異議が唱えられている。中国側から見れば、各国が競って買い付けにくる食肉市場は、やはり伝統的農耕手段の食いつぶしとしてしか映らなかったのである。

小結

同時代の国際社会を一瞥したとき、食肉産業は工業界に重要な位置を占めている。当時、世界最大の工業国に成長しつつあるアメリカの、工業生産額一位を占めているのが、シカゴに代表される食肉産業であった。西部の成牛を東部の消費地に食肉として送り出すシカゴは、鉄道、冷蔵技術に支えられ、流れ作業による大量生産の食肉加工技術を確立し、大量の東欧移民を労働力として吸収する産業都市であった⁽⁵⁰⁾。

青島屠獸場は、食文化を全く異にするアジアの一角に植え付けられた近代的屠獸場である。山東西部の産地から鉄道で輸送された成牛は青島で食肉加工され、冷蔵技術に支えられてドイツ、ロシア、日本、アメリカの、主として軍用食として消費されていった。その

流れには一見、シカゴのミニチュア版を思わせるものがある。

もちろん、中国における牛肉積出港は青島に限られるわけではない。しかし、青島屠獣場の有するスケールと近代設備は、国内では他に類を見ないものであった。満州に進出した日本が大連港から満蒙の食肉を輸出することを図り、その将来を考えたとき「畜牛の買い付けより屠殺、包装、冷蔵、船積みに至る迄と総べての輸出機関完備し極めて秩序的に行はる」⁽⁵¹⁾ 青島こそがモデルとして仰がれたのである。

しかし、このような近代的食肉産業は、当時の中国に根付くものであったろうか。仮にそれが牛以外の家畜を対象としたものであったとしても、大規模にして衛生環境を整えた近代的な屠獣場、食肉産業が青島モデルとして国内に波及したという痕跡は見いだしにくい。民国6年に北京で全国警務会議が開かれ、主要都市には必ず屠場を設立すべきことが申し合わされ、天津では翌年に開場されたというが、中国官営の屠場は一般的に設備の不完全さ、検査の甘さなどが指摘されている⁽⁵²⁾。そもそも畜牛に対する思いがまるで違っていたのである。

中国農村において畜牛は農耕用であることが基本である。そのため、牛の生産も基本的には個々の農家が副業的に行っていたのであり、食用といっても役牛が老齢化して役目を終えたときに屠殺されるものであった。1915年の青島軍政部の調査報告によれば、山東省の地元で食用に消費される畜牛の数は、大約10万頭と称され、推定頭数150万頭の大体7%弱とされる。そして、その数値はほとんど変わることなく推移したとみられる⁽⁵³⁾。逆に各国は中国国内での牛肉消費が少ないことに輸出の活路を見出していたともいえる。近代的な屠獣場（食肉加工場）を支える畜牛生産と国内消費の場がこのように脆弱な構造であることから見れば、青島の食肉産業は伝統と近代が強引に接木されたものと言うことができよう。そうであれば、中国側からは絶えず、畜産資源の侵食という非難の声が上がってくるはずのものであった。

さて、青島屠獣場は1922年12月、旧ドイツ膠洲湾租借地還付とともに日本から市政府機関に引き渡された。そして1925年、華府会議条約等により日中合弁会社とすることになったのである（株式総額銀40万元、2万株のうち、中国側54%日本側46%）⁽⁵⁴⁾。そして、山東牛の日本輸出はこれ以後まだまだ増大していくのである。

お わ り に

煙台開港から青島の中国返還までの時期において、山東省の土産が国際交易品となっていく有様とその担い手を、落花生と牛肉について見てきた。開港前夜から山東沿海におけ

る土産交易の一端を担ってきたのは広東人、福州人、寧波人などの南方人であった。彼らは外国船の買弁として土産の買い付け、売りさばきを代行していたが、とりわけ落花生交易においては広東商人の活躍が顕著であった。また、ロシア軍、ドイツ軍の軍糧として求められたのが牛肉であり、その加工のための近代的設備として建設されたのが青島屠獸場であった。大規模な食肉処理能力と冷凍施設の活用により、山東牛の販路はウラジオストック、日本、マニラにまで拡大していった。

ところで、同じく土産品というものの、落花生交易と牛肉交易ではその商取引のありかたが全く異なることが以上から看取できた。伝統的に南北貨交易のなかで取り扱われてきた落花生はその商習慣を殆ど変化させることなく、海外に輸出されていったのであるが、それに対して列強の軍糧として求められた牛肉輸出においては、育牛の段階では当地の商慣行に従っているものの、処理場に持ち込まれてからは解体、検査、荷出しと全ての行程において列強のリーダーシップのもとに経営されていたのである。そこには山東を巡る列強の力関係が自ずと反映されていたのである。

註

- (1) 王賽時『山東沿海開発史』齊魯書社2005年、第9章、第8節、pp. 465-479。
『清宣宗実録』卷215、道光12年7月丙午の条
六月十八日。有嘆咭喇夷船復駛至山東洋面。並刊刻通商事略說二紙。大意以粵省買賣不公。希冀另圖貿易為言。
- (2) 『清宣宗実録』卷394、道光23年7月甲子の条
又諭、據梁寶常奏、登州府屬之榮成、文登、福山等縣有雙桅夷船二隻停泊。內有廣東江西等省民人。駕三板小船上岸布散知單。欲與商民貿易。似係內地奸匪。勾通 嘆夷奸商。越界私販鴉片煙土等語。
- (3) 民国『福山県志稿』卷5、商埠志 緣起
- (4) 王運『明清山東運河区域社会変遷』人民出版社、2006年、pp. 342-349
- (5) 『清文宗実録』卷286、咸豐9年6月戊辰の条
近來外國商船、有至登州、牛莊、及沿海各處、販運洋藥。甚至有裝載豆餅、行抵吳淞之事。山東煙臺地方、有商船停泊貿易。並於該處買地造屋。有粵人范姓、經理其事。因鄉民阻止。互毆受傷等情。現在條約未換。無論何處海口。均不應私行貿易。(中略)將私至煙臺經手造屋之廣東人范姓、密速查拏、務獲究辦、毋令逃逸。至豆石豆餅等物、上海議定、不准夷人販運。
- (6) 『郭嵩燾日記』第1卷、湖南人民出版社、1981年、p. 257
- (7) 『郭嵩燾日記』第1卷、p. 254
- (8) 民国『福山県志稿』卷5、商埠志 商業
- (9) 劉正剛『広東会館論稿』上海古籍出版社、2006年、p. 314
- (10) 航業連合協会芝罘支部編『昭和14年版 芝罘事情』昭和14年、p. 92

- (11) 『郭嵩燾日記』第1巻、pp. 267-268
- (12) 『郭嵩燾日記』第1巻、pp. 271-272
- (13) 青島市档案馆編『青島旧事』青島出版社、1991年、p. 127、馬庚存「海雲堂隨記」
- (14) 青島市档案馆編『帝國主義与膠海関』档案出版社、1986年、第二編貿易報告（一）膠海関十年報告、一八九二至一九〇一年報告、貿易変化、p. 53
- (15) 『帝國主義与膠海関』航道測量 p. 66、新的導航補助設施 p. 67
- (16) 『帝國主義与膠海関』人口 p. 62
- (17) 沈雲竜主編『近代中国史料叢刊』第31輯、文海出版社、『膠澳志』巻12 大事記 pp. 1458-1468
- (18) 『膠澳志』巻5 食貨志 商業 pp. 795-797
- (19) 庄維民『近代山東市場經濟的變遷』中華書局、2000年、p. 207
- (20) 毛雍琛「丹商宝隆洋行」p11、青島市政協文史資料委員会編『青島文史擷英 工商金融』新華出版社、2001年
- (21) 庄維民『近代山東市場經濟的變遷』p. 259、p. 307
- (22) 『膠澳志』巻5 食貨志 商業 p. 823
本埠の広東商人で土産を扱っているものは景昌隆、広有隆など八家あるが毎年の営業金額は百萬元から百五十萬元。しかるに日商三井は落花生油、石炭をあつかって二千萬をえている。広東商人八家で彼一家に及ばない。日商の二流どころ大杉、鈴木でも年商四五百萬元に達する。洋貨の輸入では、前清時代に広東、福建、浙江、山東四省の商人が神戸、横浜、長崎に店を構え土産の輸出、日本の綿糸、マッチ、洋糖、水産、雑貨を輸入していたが今日では凋落してしまった。
- (23) 青島守備軍民政部『青島屠獸場』1919年3月、p. 1。同『青島の畜産』1919年5月、pp. 2-4。『山東問題細目措置ニ関スル参考資料（第二号）』pp. 40-41。これらの資料においては仮屠獸場建設年、屠獸場起工年において食い違いがあるが、適宜勘案した。
- (24) 『山東問題細目措置ニ関スル参考資料（第一号）』p. 223
- (25) 『清史稿』巻153、邦交1、俄羅斯（中華書局、16冊、p. 4504）
- (26) 『清史稿』巻153、邦交1、俄羅斯（中華書局、16冊、pp. 4507-4512）
- (27) 浅田進史「膠州湾租借地におけるドイツ植民地支配と労働力移動（1897-1914）」神戸大学文学部・国際シンポジウム「コロニアル都市・青島の形成とその歴史的位相」報告集、2006年2月
- (28) 同上
- (29) 青島市档案馆『帝國主義与膠海関』档案出版社、1986年、p. 43
- (30) 同上、p. 174 家畜養殖
- (31) ベッツ『山東省の經濟的發展』南滿州鉄道総務部交渉局、1915年、p. 69
- (32) 『帝國主義与膠海関』、pp. 174-175 家畜養殖
- (33) 『帝國主義与膠海関』pp. 207-208、1922年～1931年報告（1934年6月付）畜牧
- (34) 同上
- (35) 同上、pp. 452-453、宣統二年四月二十二日 山東巡撫孫 札文
窃維農事為民食所繫，牛牲為力田要需，我國素尚農業，故農氓田戸率養牛蓄以資利用。自通商以來，東西洋人視牛為主要食品，是牛隻添一去路，然不陡出大宗銷耗猶可生息休養，消長相抵，無大妨於農業。乃近聞津埠德國各行代俄國糧台販買牛隻，四出搜求，直至黃河

南北。其運至津在礦務局附近，日宰殺百數十頭，屢裝運牛肉出口。並自上年起，由火車運多數生牛出口，共計不下十數萬頭。在俄人糧台竭力購運，是否用以製造軍隊食品，為軍事之預備，弗從懸揣，姑不具論。即北洋一帶驟此大宗牛隻，因之牛價日漲，農家多無力購買，荒蕪種植，影響農事，豈為淺鮮。況以有限之牛隻，供無厭之取求，若不即行禁阻，勢必有購買一空，斷絕孳生之一日。農政前途所關綽鉅，擬請憲台札飭津海關道，嚴行查禁販運出口。並請咨會山東撫部院一体查禁，以維農業，而重民食，實為公便。

(36) 『帝國主義与膠海關』 p. 454、1911年4月13日 山東巡撫復照

(37) 同上、p. 453、宣統三年三月十一日 俄領事來照

(俄領事照會 宣統三年三月十一日) 本領事去腊到煙任事，所有貴撫院定章限數運牛出口之案未能詳悉。今已三閱月，調查得貴國出口之牛並非耕牛，多係貴國民間養蓄肥壯之牛，專作為出口謀利之計，貴撫院之定章限數出口，未免太苛。茲特照請速為弛此限數之禁，(後略)

(38) 同上、p. 455、宣統三年四月十七日 山東巡撫孫 札文

案照上年(宣統二年)限制運牛出口一案，議定東、膠兩關並計每年共准運牛六千隻。本年迭挹駐濟德領事函，軫青島商會稟，以限制太嚴，商務受其影響，請將前定限制撤銷或加多額數，至少再增一倍等語。(中略)即自西曆六月一日起，東、膠兩關並計每月共准運牛出口一千隻，屠宰凍牛亦在此數內。

(39) 南滿州鐵道(株) 総務部交渉局『青島ノ商工業』大正3年、pp. 1-2、p. 6、pp. 10-11

(40) 青島守備軍民政部『青島屠獸場』、1919年3月、p. 4

(41) 南滿州鐵道(株) 臨時經濟調查委員會『滿蒙牛日本輸出に関する調査』昭和5年、p. 4

(42) 大津留厚記「ケルステン日記」『小野市史』第6卷、2002年、p. 828

(43) 『滿蒙牛日本輸出に関する調査』 pp. 8-10

(44) 南滿州鐵道(株) 天津事務所調査課『山東の畜牛』昭和11年3月、p. 1、p. 16

(45) 青島守備軍民政部『青島の畜産』1919年5月、pp. 6-7

(46) 南滿州鐵道(株) 天津事務所調査課『山東の畜牛』 pp. 29-31、pp. 87-89

(47) 『青島の畜産』 p. 55

(48) 『帝國主義与膠海關』 pp. 174-175 家畜養殖

(49) 同上、pp. 456-459、山東省長屈映光訓令

又查東省地半平原，土多粘重，農戶耕田必賴牛力，以故畜牛之家十常八九，而泰、兗、沂、曹及臨清、武定一帶，尤為蕃滋。自民國五、六兩年水旱頻仍，農多失業，無力飼養牛隻，多以賤值出售。及六、七兩年牛疫盛行，傳染甚烈，牛之死者，十居三四。近四、五年來，英商和記、美商開治、俄商豐記、日商高橋，皆以山東牛隻產多而價廉，竟在濟南商埠設棧收買，每日由各县販至濟南，由濟南運至青島及西伯利亞，輸出外洋者有二百余頭。洋商豐記在商埠設屠牛場，每日屠宰一百余頭。是一日之間銷耗于外商者，即有三百余頭，一年之間即有十万余頭，總計近三年來，已有三十余萬頭，輸出之巨實可驚異。

(中略) 至牛隻一項，從前原定限制東、膠兩關每月不過一千隻，核之兩關按月呈報生牛出口數目，並無逾溢。若如來呈所稱，每日輸出有二百余頭之多，實堪詫異，應候分令東、膠兩關，濟南道尹，確查情形，再行核辦，仰即知照。

(50) 大津留厚「シカゴ食肉産業労働者の世界」『大阪教育大学紀要』第Ⅱ部門、第40卷、第2号、1992年2月

(51) 『滿蒙牛日本輸出に関する調査』 p. 328

(52) 滿鉄北支事務局調査室『天津ニ於ケル屠場並牛肉輸出概況』 p. 24、p. 39、昭和13年2月

(53) 『山東の畜牛』 p. 24

(54) 『滿蒙牛日本輸出に関する調査』 p. 244